

A woman with short black hair and glasses, wearing a white nurse's uniform with a white apron, stands in a brightly lit hospital hallway. She is holding a green folder with a white sheet of paper inside. The background is blurred, showing other people in white uniforms and a red sign in the distance.

小さなサインを見逃さない。
赤ちゃんも。看護師のことも。



「ここが私の職場です」



香川医科大学附属病院（現・香川大学医学部附属病院）が誕生して以来ずっと、この病院で患者さんのために働いている看護師がいます。総合周産期母子医療センター新生児集中治療室看護師長 森本加代子さんがその人。森本さんは、看護学校卒業後、他の病院勤務を経て、附属病院開設に伴って勤務を始めました。手術部、救命救急センターなどで看護師長を勤めた後、現在は今年4月に指定された「総合周産期母子医療センター」で看護師長として活躍しています。

現在、病院全体の看護師数は410名。看護師は勤務年数に応じた教育計画に沿って、様々な役割を身につけていきます。森本さんは、そのリーダー的存在。「専門性を持った看護師を育てる」という看護部の方針ですが、指導をするというのは大変だと実感する毎日」とか。例えば、ここでは3年目の看護師が入ったばかりの看護師を指導するためのプリセプター育成研修を行っているのですが、「指導する側の

3年目の看護師が自信をなくす場合もあります。だから私たち周囲の看護師が、サポートしたりケアしたりしてあげないといけない」。患者さんにとってより良い看護を提供するためにも、常に成長を続けようとする後輩たちを見守っていくのが森本さんの役目です。その視線は、もちろん患者さんにも向けられています。「ちいさな赤ちゃんが懸命に出すわずかなサインを見逃すわけにはいかないですからね」。

森本さんがこの仕事に就かれたきっかけは？「近所に看護師をしている方がいて、小さい頃からその姿を見ていました。そうね、あの方がいなければ看護師という選択はしていなかったかもしれないですね」。人の役に立てる、人のために何かをするという喜びで、現在まで走り続けてきたといいます。看護士の仕事は、だれもが知っているようにハード。「今はそれでもないけれど、開院時は、朝8時に出てきて夜中まで働いて、また次の朝出勤、ということも続きましたよ」。それで

も「やめよう」と思わなかったのは、「看護師という仕事が好きだから、かしら」。

プライベートでは、2人の娘を持つ母でもある森本さん。ちょうど娘さんが小学生の時に病院の開設が重なったので、「おばあちゃんにまかせっぱなし（笑）」。授業参観にいけないことも多々あったといいます。「娘が高校生の頃かな、「いつまで仕事続けられるんだろうな」っていったことがあったんです。そしたら「好きな仕事なんだから、いつまでも続けられればいいじゃない」っていつてくれて。寂しい思いもさせたのに、分かってくれてたんだなっとうれしかったですよ」。

「だからこそ、いつまでも社会に関わっていききたい」母の顔からプロの看護師の顔に戻って語る森本さん。遠い日に森本さんが憧れたように、その姿に憧れる若い人も多くに違いありません。

保育器の中の、赤ちゃんをお世話する森本さん。



森本加代子

PROFILE

もりもと かよこ
香川大学医学部附属病院
総合周産期母子医療センター
新生児集中治療室 看護師長



工学部の授業がスタート。



次回の授業に備え、勉強をする絹田さん。

「工学部は女の子が少ないからか、女の学生さんもよく話をしてくれます。」



大学で指導にあたる人という真つ先に教授や助教を思い浮かべがちですが、他の職員の支えがあってこそ成り立つもの。特に、実験や実技の多い工学系の学部では、サポートスタッフの存在なくしては実習を語ることはできません。

絹田さんは、工学部の実験実習係の職員。教授や助教の行う演習についてのサポート的な業務が主な仕事です。「担当の教授や助教から、次の演習でどんなことをやるかという連絡を受けると、その資料を揃えたり、実際にプログラムを組んでみたりして準備をしておきます。質問を受けることなどもありますので、演習項目については事前にどんな手順でプログラミングができるかを、どのようなアレンジができるかなどを、検証しておくんですよ。把握しておかなければアドバイスできませんから」。さらりといいますが、スキルなくしてはできない仕事です。

情報系の大学院を卒業した時、「まだ、勉強が足りない」と思っていたという絹田さん。仕事をしながら、自身の勉強にもなるというのが今のこの仕事に就いた理由といいます。演習補助という仕事は、「毎日、一緒に勉強している感じ。勤め始めて知ったことも多いんですよ」。実は、ご自宅は岡山とのことで、毎日通勤に2時間

絹田志穂

PROFILE

きぬた しほ
香川大学工学部 実験実習係

モチベーションが上がらない…
そんな時、気軽に相談できる相手になれたら。

以上かかるという絹田さん。「朝は8時過ぎに出て、帰るのは遅い時は…うーん、10時過ぎますねえ」。定時に帰っても問題はないんですけど…と言葉を足しながら、「でも、その日の演習中に気になった個所などは、その日のうちに解決しておきたいですから」とにっこり。準備にも復習にも時間をかけるのは、学生にできるだけ分かりやすく教えてあげたいから、といいます。

コンピュータの世界は、日進月歩よりもさらに早く、秒単位で目まぐるしく進化する世界。「蓄積した情報が少しするともう古い情報になる。追い付くだけでも大変ですよ」。だから大学に入ってからいろんな悩みがでてきたり、壁にぶつかったりする学生も多いといいます。「常にスキルアップしなければならぬので、想像よりもきつと大変。自分も体感してきたことだから、ああ、今、悩んでるなあ、って手に取るようにわかる」そう。だから、放っておけないと、仕事が終わってから学生との悩み相談を受けることもしばしば。「教授や助教と違って、世代も近いから相談もしやすいのかな」。

モチベーションが上がらなかった学生がだんだんやる気になっていったりすると、本当にうれしいんですね、と姉のような表情で微笑む絹田さんです。